

昭和二十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
(毎月一回、十五日発行)

(通第一二八号)

慈光

第十一卷

第十一號

目次

繫縛と解脱(三).....	近角常観(1)
善知識を訪ねて.....	福島政雄(7)
ひとりいて喜ぶところ.....	花田正夫(11)
雲霧と暁(二).....	榊原徳草(14)
正信偈私解.....	白井成允(19)

繫縛と解脱(三)

近角常觀

十六、『歎異鈔』第二章

『歎異鈔』第二章のお示しには、

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうぶりて、信するほかに別の子細なきなり。……………

第二章の聖人の御自督ごじとくも外の事は無い。親鸞自分の身は、最早や、何れの行も及ばぬ、何れの道も絶え果てた仕て見よう無き者である。しかるに此の行き詰つた仕て見よう無き身の上を、捨てさせ給わぬは大悲の親様、南無阿弥陀仏、御一仏、この親様一人が、此の者を、念仏一つで助けて下るとの有難き仰せに預つて見れば、もう「信ずる外に別の子細なきなり」……………。道無き私を助けるとの、その遣る瀬なき仰せを頂く外無いのである。

如何なる医者からも見放され、もう仕て見よう無き私を、其の者を助け度いばかりに、この南無阿弥陀仏の衣服の薬を成就したと、渡されて見れば、もう親鸞におきて

早や、其のお見捨てなき仰せに頭が下り、信ぜずにおこり、頂かずに置こうと思つても、信ぜず頂かずに居られなくなるのである。

今自分のこの仕よう無き処を、仏かねて知ろし召して、

此の者を、久しく待ちかねるとの仰せを聞けば、設い人から信ずるなど言われようが、之を信ぜずに居られようか。

設い人から虚言と言われようとも、今現在自分が斯く事実に行き詰つて苦しんで居る。この心中を知り抜き、これを遣る瀬なく言うて下さるお心と聞く一念には、此方より飛び立つばかりに、其の御親切なる仰せを頂く外無いとなるのである。で此方から信じようとして信ずるにあらず、余りお慈悲の広大なるに、此方が信ぜずに居られなくなるが、「信ずるより外に別の子細なきなり」の仰せなのであります。

……………念仏はまことに浄土にむまるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。……………

而して其の念仏が、之を称えると果して極楽に生れるのか、又は却つて地獄行きの種になるのか。乃至この念仏に何れ丈の功德があるのか、そんな事は更に此方の知る処でない。何故かというに、もと／＼念仏が、広大な功德善根と思つて、これを頂き称えるのでは無い。現在今自分の

は、外の薬を飲もうでは無い。念仏以外になお往生の道をも存知して居るならば格別であるけれども、親鸞においては、最早や何れの道も絶え果てゝ居るのである。

しかるに、その親鸞の身を哀れみて、それを助けるために御成就下された本願念仏の思召しと、よき人法然聖人よりお知らせに預つて見れば、もう「信ずるほかに別の子細なし」……………。処がここで言わなければならぬは、「もう仕ようが無いから、この念仏でも」と、ここで此方から幾分たりとも力を入れて信ずるのでは無い。ここは能く人の取りぞこなわれる処である。

この間も喜ばれる方が「信樂開發の時刻の極促とお聞かせに預ると、もう信ぜさせて貰う一つだ」と言われる。成る程信ずる一つに遅わぬも、その信ずるが、こちらから信ずると力を入れて信ずるのでは無い。私の方は手も足も出ぬ仕て見よう無き者を、仏の方は、其の仕て見よう無き者を、捨てさせ給わぬ大悲のお心と聞く時は、其の一念に最

如く、かく行き詰りて仕ようのなき、此の者を捨てさせ給わぬ南無阿弥陀仏を頂くと、如何なる訳のましますかは知らねども、其の思召しの忝けなきに、これを頂き称えずに居れぬから称えるのである。

……………たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずせうろう；

設いこの頂くお慈悲が、虚言である、念仏は地獄行きの種じや、と言われようとも、もう此のお慈悲が頂かずに居られるもので無い。設い法然聖人に欺かれ、「念仏して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候」。何故なれば「もう此のお慈悲を信ずるばかり」と、こちらから力みて

信じた信心ならば、若し虚言と言われ、欺かれたと言われたら、どまつかんならん事もあろう。けれども今私が頂く信心は、此方から思いを運びて信じた信心じや無い。自分の如く、かくまで三界に道の絶え果てた者を、かくまで遣る瀬なく言うて下さる大悲の御心を聞けば、設い虚言であるが、だまされたであろうが、其の一仏の御親切の有難さに、人は虚言とも、欺かれたとも言わば言え、もう自分に於きては「たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候」である。

……………そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄におちてそうらわばこ

そ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ。い
ずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定す
みかぞかし。弥陀の本願まことにおわしまさば、……
法然のおおせまことならば、……親鸞がもうすむね、ま
たもてむなしかるべからずさうろうか。云云。

其の後悔せぬ訳は、此のお慈悲以外になお道の有る者な
ら、念仏して地獄にも堕ちた場合には「やりそこなつた」
とも「欺かれた」ともいう後悔もあるであらうが、この親
鸞に於きては「地獄は一定すみかぞかし」……一つも
思うようにならぬ。他に道のない。その地獄一定の者を助
けるとの大悲の仰せを頂いて見ると、もと／＼自分におき
ては、他に仕て見ようの無い、地獄は一定すみかの身であ
つたのである。この「地獄は一定すみかぞかし」という処
が、先き言うもがきの手も足も止み「唯念仏して弥陀に助
けられ参らすべし」との善き人の言葉を信じて、大悲に安
住させて貰うた姿であります。してその地獄は一定すみか
の者が、このお見捨て無きお慈悲一つで、此度はやすやす
と浄土に往生させて貰う。

ここはこの遺る瀬なきお慈悲で知らされて見ると、実に
我が身の悪しきはきりも無し、真に地獄以外行き場の無い
我々である。然るに其の者を仏かねて知ろし召し、飽くま
でも飽くまでも捨てさせ給わぬとの仰せ故、実に私の浅間

故助けいでもよい、世話せいでもよいけれども、矢張り同
じく子供故世話をして下さるのである。悪人の方はこは一
刻も捨て／＼おけぬから、世話して下さるのである」とい
うの事になる。

況んや日頃、悪人をお助け／＼と頂く結果「善人の方は
助けいでもよき者なれども、仏はそれをもお助けである。
朝廷より慈善を施して下さるという段になると、その目
当は、食べられぬ貧乏人にあるけれども、財産有る者にも
遣らぬ訳に行かぬから」というような事になつて仕舞うの
である。すると善人をお助け、という事が甚だ意味の分ら
ぬ事になり、結局善人の善も、大いに間に合うように思え
る様になるのである。

こは非常な取り違ひなのであります。成る程、陛下より
救恤の金を下さるとなると、如何なる有福なる金持ちにも同
様に下さるのであるが、元来金持の、自ら頼みとして居る
金と、陛下より下さる金とは、金の性質が違つて居るので
ある。仏より下さるまことの金に比べると、我々の積み立
てゝ居る金は質金なのである。虚仮不実の「うそ、いつわ
り」の金なのである。其の質金を持ちながら、それを何処
までも、自ら善いと思つて居る故、どうしても仏のまこと
の金が頂かれぬ。

が、頂いて見ると、如何なるが真の金、真の善かと言う

しければ浅間しき丈け、弥々、かかる者を能くも／＼と喜
ばせて頂くのである。

「今日まで、長々、こんなことでは／＼と、我身の悪し
きを氣にかけて居たが、このお慈悲を聞かせて貰うと、こ
んな事では、こんな事では無い。能くも／＼かかる浅間し
き極悪深重の私を捨てさせ給わぬ大悲の忝じけなさよ」
と、なるのであります。

十七、善人も其の善を廻して往生す

さて此頃は、此の前の『求道』にも書いて置いたのであ
るが、此の一念の味わいにつき、善惡の二つに係わらぬ、
という事を深く喜ばせて貰うて居る事であります。こは今
までも度々申したのでありますが、熟々頂かせて頂くに、
此の味わいは実に有難い。

今日まで私共は、動もすると、仏のお慈悲は善惡に係わ
らずお助け、というように頂いて居るのである。も一つ言
うと『歎異鈔』の第三章に、「善人なおもて往生をとぐ、
いわんや悪人をや」とある故、悪人ほど哀れみて助けて下
さるのが仏のお慈悲であるとなる。すると「善人なおもて
往生を遂ぐ」の方は、善人が善の出来るは、こは誠に結構
であるが、併しその結構な者をも仏は助けて下さるとの事
になる。すると何だか、悪人の方は、助けにやならぬから
助けて下さる、となり、善人の方は露骨に言う、と、「善人

と言うに、今日まで我々が自ら真の善であると擧げて居つ
た善は、大間違ひのまがい善で、真に真実の善、真実のま
こととはというと、仏より私の其の虚仮不実のにせの有様を
御覧下され、悪しければ悪しきだけ、弥々その者を見捨て
ぬとの、この仏のおまことが真の善なのである。

しかるに我々はこれを頂かず、何時までも浅間しきを思
わずして、自ら善人である、一つかど善い事が出来ると思
うて居るのが、大間違ひなのであります。

で、一度、このお慈悲に気づかして貰うと、今まで「自
分は善人じや、金がある」と、自分の間違つた善を頼みに
して居たのが大変で、其処になると、如何なる善人も其の
一念に、今までの自分の善の衣を脱ぎ代えて、唯一筋に、
其の者を遣る瀬無く思召す、仏の大悲より下さる真実の恵
みを頂くの外は無い。

故に「善人なおもて往生をとぐ」とは、善人が自分の善
の上に、更に仏のお慈悲を重ねて往生を遂ぐるの意味にあ
らず。信の一念に、今日まで自分が何より大事として置い
た、その自力作善を廻して、遣る瀬なき大悲の御哀れみを
頂き、其のお慈悲一つで往生を遂ぐるのである。『歎異
鈔』三章のお示しは、実にこうなのであります。

十八、自力の心をひるがえして

『歎異鈔』の三章には、

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを世の人つねに曰く、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をやと。この条一旦そのいわれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。……

即ち今日まで、自分の善を頼みにして居る自力作善の人は、ひとえに他力を頼む心かけたる間、弥陀の本願が頂けぬ。「然れども、自力の心を廻えして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生を遂ぐるなり」とあるのである。ここは『和讃』に

罪福深く信じつゝ、善本修習するひとは、
疑心の善人なるゆえに方便化土にとまるなり。

みんなが、仏智不思議を頂かず、仏の大悲を疑うて居るの故に、自分で善きことをせんらぬと、力みて善本修習するとなるのである。皆様が信心を得て、自分が立派な者になろう、自分が偉くなくなろうと思わるるも、畢竟これに外ならぬのであります。

然るに仏の遺る瀬なき他力のお心は、其の幾ら自分で善くなろうと思つても、善くなれぬ其者を見捨てぬのが、南

ねば、大小聖人みなながら、如来の弘誓に乗ずなり」……如何なる大小の聖者と雖も、向う様より来よとの大悲弘誓の仰せ一つで往かれるのである。その仰せましますば、如何に自分に金があるうが、如何に竜樹・天親の二菩薩が修行をなさるうが、其の金や修行の力では、何の役にも立たぬのである。その証拠には、何程自分が善を積みて、善くなろうと思つても、現に今善くなる事が出来ているのは無い。……又他の『和讃』には、

像法のときの聖人も、自力の諸教をさしおきて

時機相應の法なれば、念仏門にぞいらたまう。

時機相應は、時機は正に末代、五濁惡世、五逆十惡、誹謗正法の世の中である。しかるにこの五逆十惡の者のために、態々かくまでの時機相應の遺る瀬なきお慈悲とはと、竜樹・天親の二菩薩を初め、みなここで自力の諸教を差し置き、自分の長々の善をひるがえして、念仏門にお入りなされたというのである。

我々、やゝもすると、竜・天二菩薩の如きは、充分自力で行けるのであるけれども、ここに他力の道があるから、いらぬことをせんよりは、他力に入られたという思いがあり易いのである。けれどもこれは全く間違いで、かく自力の万行諸善ではゆけぬから、今までの自力の心をひるがえし、南無阿弥陀仏一つを、お頂きなされたのである。ここをよく思わせて頂かねばならぬのであります。

無阿弥陀仏であるとの仰せである。これを聞かせて貰うと「自力作善の人は……弥陀の本願にあらず、爾れども自力の心をひるがえして、他力を頼みたてまつれば、眞実報土の往生を遂ぐるなり」と……このお示しを耳にするなり、今日まで自分は一角善が出来ると、善を誇りて居た事の浅間しや、今までこれ程のお慈悲に預りながら、善をじなくてはならぬと、自分の虚偽不実の善に力をいれて居たことの申し訳け無しと、ここで如何なる善人も、今までの自力の善を廻らして、本願他力を頼み奉るのである。

そのひるがえすは、何でひるがえすかと言うに、善人が自分は善が出来けれども、仏のお助けは自力の善でないからと、ひるがえすのでは無い。

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら 如来の弘誓に乗ずなり。

仏の浄土に参らせて貰うには、如何なる竜樹・天親の如き大小の聖者方と雖も、自分の善根では到ることは出来ぬのである。これは譬えて言う早い話が、観菊の御宴に宮内省から御招待を受けるとする、其時、その御宴に侍することを得るは、其の御招き一つで、侍らせて頂くことが出来るのである。如何程身分があり、金があつたかて向うさまより来よとの仰せが無くば、参ることが出来ぬのである。それと同じで「願力成就の報土には、自力の心行いたら

み仏をたたへまつる

オルデンベルヒ

恐るべき怒濤の巻きおこる時

水にかこまれしもの

老と死に迫られしものは

何処に鳥を見出すべき

劫波よ！

われこれを汝にとかん

『何物も存ぜざる所

何等の固持もあらざるところ

そこに唯一の鳥あり

涅槃といふ

老と死との終局なり』

善知識を訪ねて

福 島 政 雄

その次の善知識は又南の方の海潮の押し寄せる様な所に一つの国がある、その国の名を那羅素という。そこに仙人がいる、大威猛声仙人という。其処を訪ねて行くようにと教えるのであります。そうすると善財は悲しみ泣いて涙を流して別れて菩薩行というものはなか／＼六つ難しいものであるという事を念じながら、併し菩薩の福力心というのであるありますが、さいわいその力を与える心・金剛心・如何なる事にも屈せぬ堅い心・莊嚴心―非常に嚴な心等をおこし段々と那羅素という国に行つて大威猛声仙人を探します。そうすると其処に大きな林があるのであります。善財はその大きな林の中にはいつて見ると、そこには栴檀樹がはえているのを始めとして色々の林の景色がある。そうするとその大仙人はその樹の下にいる、そして千人も万人もの仙人がその大仙人の囀を取りかこんでいる。そしてその仙人達は鹿の皮の着物を着ている、又木の皮を着物にしている、それから細い草なんかを編んで着物にしている、そ

それからその仙人が善財の手をとつていたのが離れますと、善財はもとの通りの体でもとの所に居るという事に気が付いた。

これは非常に面白い所でありまして、仙人が善財童子の手をとつたら非常に立派な世界が見えて来たと言うのであります。私もそれに似た多少の経験があるのであります。自分が非常に徳のすぐれたお方の側に近付いて居りますと言うと、その徳の高い方に手をとられて居る様なものであります。そうするとその徳の高い方の境地が自分の境地である様な気になる。非常に自分は立派な世界に自分が立派な者になつて居るように見えたり感じたりするものであります。マア虎の威を借る狐というのはいゝ意味ではありませんが、そうでなくて、立派な徳の香が、その人に手をとられて居るとその人に始終近付いている間に、こちらに参み込んでそして自分も相当に立派になつたように思うのであります。併し離れて行つてしまふと元の木阿弥と言ふ風な事でありまして。広島時代に西晋一郎先生という方がおいでになつて、なか／＼立派な方で、始終お目にかゝつて又お家に上つてその西先生から謡曲を教えて頂いた事もありますし、色々の御話を聞いたものであります。それからこちらから色々の問題を持つて行つて先生に食つてかゝつた事なんかもあります。そしてる間に西先生の立派な境

ういう仙人であります。其処へ行つて善財が色々の事を尋ねるのであります。仙人は善財を非常に讃めるのであります。そして沢山の仙人が色々の優れた香や花を善財の上に散らすとしてこの童子は必ず一切衆生を救う様になるだろうと云う事を予言するのであります。そして善財に告げて「自分は菩薩の無勝幢解脱門―この上も無いと言ふ解脱を得て居る」と言うのであります。そうすると善財童子は「その解脱門の境地はどういう風でありますか」と尋ねますと、その仙人は黙つて右の手を伸して善財の頭の天辺をなでるのであります。それから善財の手をとる、そうすると不思議な事になるのであります。善財が自分の身を見ますと、十方の百千の仏の国、微塵数の世界の中に自分はちやんと行つて居る。そして沢山の仏様の所にお参りをして居る。そしてその仏様の国及びその国に集つて居るその集りの色々の立派な莊嚴な有様を見る。その間に善財は色々の三昧、心の色々の落着きを得たいというのであります。

地というものが私に移つて居るかの如く感じたものであります。けれども広島を離れ西先生もおかくれになつてしまふと、私は元の木阿弥だと言ふ事を感じる。近角先生の事を考えてもそうでありまして。私が近角常観先生の熱烈な御信仰によつてまあ心機転換と言ふことになつて、十年間ばかり、近角先生の口真似をよくしたものであります。どなたか私がお話をする時何だか近角先生のような調子じやないかと言われました。それは近角先生から私が手をとられて居りました。だから自分は何か信仰でも大いにある積りでやつていたのであります。それだから後だん／＼やつて居て、先生はおかくれになる、自分はどういふものかという事になつてまいりますと、自分が近角先生に手をとられて居る間は自分も相当なものだと思つていたけれども、いよ／＼先生はおかくれになつてしまふと、先生はこの私をさぞなまぬい奴とお思ひになつた事であろうと云う様な事をこのごろは思うのであります。そういう事でありまして、なか／＼私共が徳の高い方に接しても本当にその人の様な風になるという事はなか／＼六つかしい事でありまして。手を執られて居る間はなつた様な気持ちであつたけれどもと言ふ様な事が始終ありますので、それでこゝを説んで見ますと非常に面白い、こんなものだという事を考えます。併し善財童子は元の木阿弥と言つてもなか／＼立派な

ものであります。

それから今度はその次の善知識になるのであります。又南の方であります、南の方に一つの村里がある。伊沙那いしゃなという村里でこの所に人が住居している所があつて阿野坦あやたん那なという。其処に婆羅門ばらもんがいる。その婆羅門の名は勝熱しょうねつ熱に勝つと言う、勝熱婆羅門と教えてもらつて、それから善財童子は心が増々深くなつて、たとえば沢山の一切衆生の種々様々の心、思いが分る様になり、それから沢山の一切衆生の種々の姿が見える、そういう境地に達したのであります。けれども飽くまで善知識を求めてまいりますのであります。だん／＼歩いてまいりまして伊沙那の村に行くと、そしてその勝熱婆羅門を見るのであります、その勝熱婆羅門というのは何か苦行のような事をしていて。太陽の光が赤々と照している日中に四面火聚しめんかむ、どちらにも火が燃え立つている。そして火が相当高く燃え立つているその火のまん中に刀山、刀の山がある。非常に高く峻しい。そしてその刀の光つている山に登つて、身をその火焰の中に投げ込んでいるのがこの婆羅門であります。その婆羅門が善財に、

「あなたはあの様に尖つて高い山の上に登つて下に燃えている火焰の中に身を投げたら、あらゆる菩薩業ごとく清らかになるようになる」

持が開けた。そして落ちて火焰に身が触れるようになる、菩薩の心が静かで神通力を榮しむという三昧の境地が開けた。

それで婆羅門が善財に告げて申しますのは、
「自分はこのような菩薩が普く円満に尽くる事無く解脱をする、こういう事を得て居る丈である」

と言うのであります。五十三の善知識の内でも非常に特色のある善知識であります、火焰に身を投げる、これはどういふ事であろうと考えさせられるのであります。

西洋のものを見ますと、「ダンテの神曲」を見ますと神曲の第二編と申します、淨罪界―罪を清める所、其処をダンテが通つて行くのであります。その入口の所でダンテは額ひたいに罪をあらわす英語のPという字であります、英語じやありませんがそのPという字を七ツ刻みつけられるのであります。そして淨罪界をズーと通つて最後に近い所でダンテが火焰の中に飛び込みますと、最後のPの字が消える。最後の罪まで消える。そうすると淨罪界の火焰というもののは罪を清める、燃して罪を清める火焰だ、こういう事になる訳であります、処がこの勝熱婆羅門の所の火焰というのはそうじや無いのであります。どうもこれは煩惱の火という風に受けとれますのであります。煩惱の火の中に身を投げ入れると、どうでありましょう。私共が狭い心

と言いますのであります。善財童子はびつくりして一寸どうかと思ひ躊躇ちゅうちよするのであります。これは悪魔では無いだらうか、悪魔が菩薩の様な姿をして自分を欺だますのでは無かるうかと躊躇するのであります。

ところがその時に梵天・色々な魔天・色々な化樂天・兜率天・夜摩天・その他天子天女・竜王に至るまで、この婆羅門が火焰に身を投げて焼くその功德を述べる。この婆羅門がその熱で身を焼く時にその火の光明が我々の宮殿を照らす、宮殿が照らされる我々は悟が開けて心の執着が無くなる、そして煩惱の中にあつても自由自在に働けるようになる。一切の仏法に於いて自由自在の心になる。体も心も非常にしなやかに、やわらかになる。自分の体は涼しくなり、心には汚れがなくなる。心が落ち着き安らかに泰然たいぜんとなると、こういう事を言うのであります。

そこで善財童子はそういう色々な天、又は竜なんか証明するそれを聞きまして、心が喜びに満ちて来た、躍り上る程になつて来た。婆羅門の所に行つて、自分が疑つていたのが悪かつた、あなたが真実の善知識であるという事が私の心にわかつてまいりましたと言つて合掌する、そして自分が今度は尖つた刀山の上に登つて身を投げるのであります。そうするとまだまん中まで落ちて行かぬ内に何とも言えない菩薩の非常な堅牢な清淨三昧という、そういう心

で居りますと、あんな心が起つちやいけない、こんな心が起つちやいけない、こんな欲が起つちやいけないしこんな事に腹を立てちやいけないと言ふ風になるのであります。がそんな事やつていて何の利き目も無い、抑える程我々の欲は増長してまいりますし、そうでありますから結局どういふ事になるのか。その刀の様な尖つた高い山と言うのは色々に解釈出来ましようが、理想の山と考えてもいい様であります。理想の山に登つて得意になると言うので無くて、煩惱の火の中に自分の身を投げ入れると、煩惱を抑えているんじゃない、煩惱の中に身を投げ入れると、そうするとその光明が／＼の天の宮殿を照す、そうすると色々の執着や煩惱が無くなると言ふのであります。その／＼の天、化樂天だ夜摩天だと言ふところの天と言ふのは、これは仏教の方では、天は感覺の樂しみの世界であります。天の樂しみというのは美しい色を見るとか、いゝ声を聞くとか、柔かなものに触れて氣持がいゝとか、おいしいものを食べるとか、そう言うものであります。その宮殿に輝きが達して、それを照してそういう感覺的な煩惱の世界というものがスウと負けて行くと、煩惱のまん中に理想の山の頂から身を投げると、そうすると忽ちかよう／＼の心持が開けて来ると。どうでありましょうか。多少そこはわかるようであります。煩惱を逃げて行く、逃げたつて駄目

なのでありまして、私共は逃げれば逃げる程煩惱が盛になる。おいしいものを見ないようなか思つてるとなおおいしい物が食べ度くなると言う様な事が始終ありますのであります。そうで無くてその煩惱のまつた中に身を投げ入れる、其処には今迄の善知識によつて善財童子の身に滲み込んでいるところの光明赫耀として輝くところのものがあ

ひとりいてよろこぶ心

十月廿四日の夕刻、京都浄住寺での池山先生の忌日を前に、旅行の準備をしていると、

「花田さん、電報」

と配達された。急いで開封すると、香川県三豊郡一の谷村の玉尾延忠さんからでした。電文は

ひとりいてよろこぶころたまいいける

しのみみしのぶきようことさらに

という有難い歌であつた。玉尾さんは現在郷里で医を開

のに転じて行くころは私共経験して行き度いという発願を持つて居ますが、多少の体験は無いじやありませんけれども、善財のこういう事を見るとなか／＼の事である、こゝまで行かないと本当の事で無いという事を感じますのであります。この著しい善知識のこゝで今晚はきりにして頂

昭和三十三年十月二十六日夜

花 田 正 夫

業していられるが、私とは大正十一年、六高入学以来、四十年近くの学友であり吉野の北岡行男さんなどと共に相たずさえて池山先生の寓居を訪い、或は歎異鈔講話の法の筈に膝を交じえた、「靈鷲山上、同聴の友」であります。

一誦して、池山忌に参会されかねる玉尾さんの胸に、去来してやまぬ恩師の面影と御声、そこにしきりにころび出る念仏の中から、この一首が生れ、それを私に托して先生の御霊前に、との熱い思いのこもつたものを感じました。

更に、二誦、三誦、四誦していますうちに

ひとりいてよろこぶ声やあけやすき

という池山先生の句が思い浮びました。先生が或時、

「人生も五十をすぎると、時々寢床に入つても仲々寝つかれない時があるものだ。そうした時すぎ去つたことなどが想い出されて走馬燈のように去来点滅する。想い出した

り、念仏申したり、で種々と法味をあげわつているうちに、ふと気付くと東の窓がもう白みかけていることがあ

ると云われて、この句を示されました。

この池山先生の法悦をそのまゝ受けていられる玉尾さんの歌に、嬉しさ、有難さ、尊さを覚えました。

蓮如上人の御一代聞書に

「往生は一人しのぎの法なり……」
とも、また。
「念仏は一人居てよろこぶ法なり。……一人居てもうれしきに二人寄ればなうれしかるべし……」
ともあります。

又、聖人の御臨末の御書、（これは聖人御滅後、御弟子の誰かが、聖人をお慕い申す情一杯で暮しているうちに、夢現の中に、あり／＼と聖人のお言葉として感得されたものと私は推測して居ります）には、

「一人居てよろこばば 二人と思うべし
二人居てよろこばば 三人と思うべし
その一人は親鸞なり。」
とあります。

以上は、「一人居て喜ぶ心」について、連想されるものを書きならべたのでありますが、今回皆様の御存じのように名古屋は空前の台風をうけまして、いよ／＼知らされま

すことは、万物流転、人生無常、ということでもあります。たとえば、五米以上の高潮に遭つた人が、畳もろとも天井におしあげられ、素手で天井を破つて、子供や老人をあげ、更に、屋根裏を傷だらけになつて破つて屋根の上のがれ、ホツと一息する隙もなく流木に家が崩されて、親も子も老人も、つなぐ手がしびれて、銘々に溺れて行くという、きびしい中にあつては、全くの孤独で、一人しのぎの法より外には何の光も見出せないであります。而もこれは台風という様な非常な場合のみではない、一人々々が銘々の業報を背負うて行くほかはありません。

それにつけては、親鸞聖人が如何に個に徹していられるかを歎異鈔二章から拝しますと、

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり。……たとい法然上人にすかされまい

らせて念仏して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候、……地獄は一定すみかぞかし。……愚身の信心におきてはかくの如し、この上は念仏をとりて信じまつらんとも、またすてんとも面々のおんはからいなり」

念仏よりほかに往生の道も、法文も知らぬ、念仏は地獄の業やら浄土の因やらも存知せぬ、いずれの行も及び難き、地獄一定の親鸞におきては、と名告られて、はるばる関東から身の危険をかえりみないで、一期一会、再会を期し難い人々との会見において、独白される聖人の、地の底から生えぬいた盤石の力強さ、個に徹したまうきびしさとたのもしさにうたれるのであります。

又聖人の常の仰せも

「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」

二章と同様で、地の底から生えぬいた御述懐で、ゆるぎない力強さがあらわれております。

「ひとり居てよろぶころ」とは個に徹して、同時に一切がそこに包摂されるころであります。「親鸞一人がためなりけり」の御述懐が同時に、甲何某、乙何某、丙何某等々がそのまゝ「私一人がためなりけり」となるのであり

こにひとりしのぎの往生が治定せしめられるのであります。そしてそのまま万人の信と一味になる不可思議さがあらわれるのであります。私一人の親が万人の親であり、万

ます。たとえば五人の子供が居て、その子等が母に向う時五分の一の母ではなく、私一人の母であります。親から云えば、一人一人がかけがえない子で、子から云えば一人一人が直接に母に結ばれていて、自分一人の母と味わえると同じ消息であります。仏が一子の如く愍念せられるから、衆生が、一人がためと信譽されるので、これは極く自然の味わいであります。蓮華を蓮華と云い、桜を桜と云うと同じであります。

自分独りで、他を容れない信であるならば、それは独善であり独断であります。よく「信仰は個人々々の問題である」と言つて、各人各様のままでよいと言う人がありますがそれは、個が多を障えているので、「源空が信心も如来よりたまわりの信心なり、善信が信心も如来よりたまわらせ給いたる信心なり。さればただひとつなり」の一味の信でなくなり、したがつて「源空が参らんする浄土にはよも参らせたまふまじ」と呵せられるところであります。なほ個に徹するといえ、何かそこにひつかゝり勝てあります。信の上からは、如来の撰取不捨のめぐみをうけて、はじめて個に徹せしめて下さるので、それまでは、何かを頼る、即ち依頼の根性は解消しないのが当然で、ひとりいてよろこぶ心は生れまいのであります。一人いて喜ぶころこそ、お慈悲一つで人生手放しのころであり、そ

人の親がそのままかけかえのない一人々々の親でましますのであります。一即多、多即一と円融無碍の絶対の信界であります。

雲 霧 と 暁

(二)

原 柳 徳 草

先日、自照会で足利浄円先生の「撰取不捨」の法話を伺つたとき、先生は「已能雖破無明闇」の「雖も」これが信心である、と話されました。私は大変有難くこの「雖は信心」を伺いました。先生は次に「無明の闇を破す……」の「破」とは無明の闇がハッキリシテキタコト」と聞かせて下さいました。

お慈悲の御よび声一つ、たゞ念佛一つが往生浄土の正因なり、と聴聞したけれども、御浄土への旅は如来様の方から手を引いて下され、うしろから押して下さるとは感じてゐるのだけれども、毎日毎夜は相も変らず煩悩の林が鳴いひびきます。これらは皆「雖」でありましよう。しかしこの我等の「けれども」を、如来様は、かねてしろしめして、このわれらに「しかるに」と応えて下さるのであります。

す。「雖」とは「しかるに佛かねてしろしめして」であつて、これこそ実は如来さまの御約束の中心、御廻向の信心でありますから、いよく撰取の心光に常に照し出される我身はどこもこゝも無明のしわざ、闇しかない、お照しを蒙るほどに無明の闇から一步も出ることのできる身なりとわからせて頂く。これが「破すと雖ども」との仰せのようでした。

『「撰取心光常照護」というのは、無礙光佛の心光つねにてらしまうが故に、無明の闇はれ、生死の長き夜すでに暁になりぬと知るべし。』「已能雖破無明闇」というはこの意なり。信心を得れば暁になりぬと知るべし。』池山先師は「心光照護」と扁額を書かれて吾々に下さつたことを思い出します。先師は又あるときの寄せ書に「光」

とかれました、私はその時「不捨」と書いたのです。すると先生は「これは何かね」と尋ねられたので、「どんなに摂取々とおさめとつて下さつても、私は逃げて仕様がなないので困りましたが、その摂取しても逃げる奴を、不捨である、捨てないのだ、とのこの不捨が有難いのです」と答えたところ、先師は「フン」と云つて、黙つて横を向かれたことがありました。私はこの「フン」の法雷に耳聾して身体が硬直したことでありました。

「フン」の一語は維摩の「默百雷の如しで、まことに取ずかしいことでありました。いまに至つてこのような御教えに遭い「心光照護」の扁額を思いそして聖人の

「摂取心光常照護」というのは、無礙光佛の心光

つねに、てらし、まもりたまうが故に」

の仰せを伺いますと、無明の闇、生死の迷いの長い夜が曉になつたと知りなさいとの御慈悲のこもつたお言葉に切々たる御憐れみを感じるのであります。聖人の声とも先師の声ともきこえて参り、お念佛が出るのであります。そして常に照し護りたまう曉の聖人、曉の池山先師を感じることであります。もちろん、曉という心光照護の御徳相に触れづめというわけには参りません、否、臨終一念の夕まで迷いの夜の闇にしか住めないのですが、清浄な曉の気配に『已に無明の闇を破すと雖も、というはこの意なり、信心

で、道を歩く時に、或は曉け方の夢の中に、「無明煩惱しげくして、塵数の如く遍満す」との御和讃が浮ぶのです。あゝまことに仕方のない奴だなど溜息が出ます、眼を外らします、そして、こゝからこれをもとにして「愛・憎・違順することは、高峯岳山もことならず」の様相を現わしてくるのだなと思いつきます。

私は皆て「曉天、窟を出すの僧」と讀のある墨絵を見たことがあります。禅の高徳の方がかいたもので、それは高い山に岩窟があり、そこから一人の僧が出て山路を逍遙している所です。山のすそには霧がたちこめて山々をとり巻いている。後方に遠山がそそり立ち雲の中に突出している。左にも右にも前にも白雲に包まれた真黒な山が浮んでいて、生きた人間としては只一人の老僧が杖に身を托して白雲と煙霧に消えゆく山路を逍遙しているのみです。その空の一方に昨夜の名残りの月が懸つてうす白い。といった一幅の絵でありました。

「曉天出窟之僧」の墨絵、この一人の僧は青年時代から長の年月、この岩窟に坐禅観法していたのでしよう、長い修行の挙句、腰に弓を張り眉に霜をおく老僧となつたのです。そしてやうやく曉の光りに逍遙し出したのでしよう。山あり谿谷あり急湍瀑あり、懸瀑あり、深山の繁みには虎・狼・毒竜がひそんでいるでしょう。煙霞雲霧に見えがくれ

を得れば曉になりぬと知るべし』の御声を聞くようであります。

無明の闇を「破す」とは、淨円先生の御言葉によりますと「ハツキリシテキタコト」であります「破」とは無明の闇が摂取の心光に照し出されて、闇の中の無明の姿が、あれもこれも迷いの姿であることが明らかになつてくることでありましょう。たとえば夜の真暗闇を懐中電灯の光を使い方に方向もわからず迷い歩いている私等に、曉の光が射して空の闇、地の闇が一枚々剥けてくる、足先が少しずつみえてくる。然し懐中電灯はまだ点つてゐるが、それとは比較にならぬ広大無辺な超日月光の曉光に眼がひきつけられる。「ただ念佛して」の呼び声に吸いつけられて、太陽が東の空にのぼってくる気配が感ぜられて、薄闇の曉光に荒野の姿がうつり映えてくるのであります。

無明煩惱しげくして

塵数の如く遍満す

愛憎違順することは

高峯岳山もことならず。

曉の光に写し出された荒野の姿、無碍光に照らし出された曉の聖人のお姿が、この御和讃に六種に震動して写し出されて居ります。

私はこの御和讃が時に胸に浴ぶのです、それは電車の中

する万華鏡のようなもの／＼の姿の中に、転じ去り転じ来つて無尽の法界を成就しているこの老僧の境界やいかに。

『無礙光佛の心光つねにてらしまもりたまうが故に、無明の闇はれ、生死の長き夜、すでに曉になりぬと知るべし』

『已能雖破無明闇といふはこの意なり、信心を得れば曉になりぬと知るべし。』

この聖人の御心、この聖人のお姿は、さながらこの一幅の墨絵ではないでしょうか。

「心は万境に随つて転ず、転处よく幽なり。」転じて併もよく幽なるは、曉光を浴びた雲霧煙霞の中を行く聖人でありましょう。

しかし、こんな聖人のお姿に接することは至極まれであります。たまさかに拝するのが関の山であります。

たまさかにしか、一年に一ぺんかそこらしか出会わないような私達にも、阿弥陀佛、聖人の訪れはちやんと準備がととのつて居ります。夜の真暗闇に皎々と輝いて下さるお念佛であります。王舎城の悲劇、逆悪の王、阿闍世が善友である耆婆のすゝめによつて世尊のみもとに向うとき、世尊は「月愛三昧」に入つてお教え下さるのです。「阿闍世の為に涅槃に入らず」という世尊の御心は月愛三昧からのお言葉であります。

「月愛三昧」何という慈悲の姿でしょう。月見草の咲く夏の夜、芒の穂のひろがる秋の夜、われらの愚痴昏闇の無明に同化して、暗中进行して下さる月愛三昧のお念佛であります。

池山先師が歎異鈔第六章「親鸞は弟子一人も持たず」の所を「麗容の聖人」の題でお話し下さった。麗容の聖人は、親鸞は如来の教法を我れも信じ、人にも教えきかむるばかりであつて、言わば小学校の運動会で校長先生が賞品を受け渡す、その賞品授與掛りのようなもの、ただ如来の御代官をつとめるばかりである、そういう聖人の「私には弟子一人もありません、弟子なんか持てる身柄なものです」との御心は「只念佛して」という阿弥陀佛の御風呂に入つて、すっかり身体のだるさや垢を落して出てこられて、あゝいゝお風呂だつたと腰を下していられる「湯上り姿の聖人」である。雲が無心に山の端を出るように、無心というか無我というか、何という麗わしい聖人のお姿でありましょう。阿弥陀佛のお念佛でありましょう。

この「湯上り姿の聖人」のお話の中に「湯は阿弥陀湯である。別に超日月光の光浴やら、阿闍世のための月愛三昧浴の設備もある。そこですっかり温つて、きれいさつぱり垢を落して、やれやれと風呂場から出て、浴衣がけで団扇の風を入れてる風情」と云われましたが、月愛三昧湯或は

来ます。

噫呼、何たる幸慶、何たる身に余るお念佛でしょう、

『「貪愛瞋憎之雲霧、常覆真実信心天」というのは、我等が貪愛瞋憎をくも・きりに譬えたり、貪愛のくも瞋憎のきり常に信心の天をおほえるなりと知るべし。

「譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇」というのは、日月のくも・きりにおおわれるけれども、やみ晴れてくも・きりのしたあかきが如く、貪愛瞋憎のくも・きりに信心はおおわれるけれども、往生にさわりあるべからずとなり。』

聖人八十三才、既に師友の在世は少く、京都のお住居は人間的には誠に寂莫たるものでありましたでしょうその聖人が切々と和讃に銘文に筆をとられて、この末代の吾等に書き残して下さった大悲の光明は、燦然と輝いて居ります。『貪愛瞋憎のくも・きりに信心はおおわれるけれども、往生にさわりあるべからずとなり』とおおわれる「くも・きり」、往生にさわりあるべからず、との仰せであります。

お念佛廻向によつて、思いもよらぬ浄土への旅を与えられる、行方もわからなかつたわれらに往生浄土の道を南無阿弥陀仏と知らしめて下さる。そして雲霧におおわれているけれども、それは往生に障りとはならないのであるとの好き人の仰せをきく。こゝには「ただ念佛して」の慈光のみ、遙かに被らしめられる法喜の信界がひらけて参るのであります。

超日月光湯で、きれいさつぱり垢を落して下さる仕掛けこれがお念佛「ただ念佛して弥陀に助けられ参らすべし」の聖人のお念佛であります。

超日月光の「曉の湯」、「月愛三昧の「夕闇の湯」何れも用意万端ととのへて、待ちわびたまう如来様から、往生浄土の道を南無阿弥陀仏と頂戴するのであります。

無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかされ

この聖人の御和讃を月愛三昧浴の御風呂と拝したらどうでしょう。切々たる悲心、闇の洞窟に泣き、自分ながらどうしてよいやらわからない私等の無知無明に「しかるに佛かねてしろしめして、煩惱貝足の凡夫」と仰せられ、この私に同じ一心になつて「かなしむな」「なげかされ」とお念佛して下さる如来聖人のお声こそ、月愛三昧浴ではありますまいか。迷いの夢はいつまでも続いてその果つるを知りません、年を重ねるに随つて耐えることも忍ぶことも駄目になり、心は常に愚痴の孤独にやせほそり、駄目な奴ということに徹底し切れず、一生涯台なし、日暮れて道遠しの感深き吾等に、無明長夜の燈炬なりと差し上げて洞窟に這入つてきて下さる聖人のお念佛があります。十年か五年の定命だと心細くおぼえほんやりしてうつろの眼を伏せがちの吾等に、生死大海の船筏なりと如来聖人のお声がきこえて

信心の述懐

林 和 輔

慈母為我泣 慈母わがために泣く
豚児不知久 豚児知らざるや久し
会遭善知識 たまたま善知識にあい

始覺大悲心 始めて覺る大悲の心
仰見同情涙 仰ぎ見る同情の涙

聞得西岸声 聞き得たり西岸の声

不思淨土樂 浄土の樂を思はず

不恐地獄苦 地獄の苦を恐れず

慚愧滿念頭 慚愧念頭に満ち

歎喜溢胸腔 歎喜胸腔にあふる

更憑仏力臨人生 更に仏力を憑んで人生に臨む

粉骨碎身尽報恩 粉骨碎身して報恩に尽さん

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

大正二年十二月二十二日誌。

正信偈私解 (十五)

— 序記 親鸞聖人の生涯 —

白井成允

祖師聖人の生涯を尋ねて今ここに其の御晩年に入る。御晩年を窺うとき私にはいつも「寂」という語が浮んでくる。寂とは悲しい語である、久遠劫より今まで棲みなれてきた煩惱の故里と別れる響きを伝えるからである。同時に其はまた言語を超えた懐しい想いを宿す語である、諸仏の覚りの彼岸を告げてくれるからである。祖聖の御晩年は「さびしい」とともに「しずか」である。人間の煩惱になやまされねばならないさびしさがしきりに感ぜられると共に、そのさびしさを通して常に如来の法に融けたまえるしずかなよろこびが偲ばれる。不断に煩惱罪濁の渦に浮沈するさびしさ・かなしさ、而もそれがいつも無碍の光明の照りわたる大海に遊ばしめられるしずけさ・うれしさ、孰れも共に「寂」という語に味わわれる感じである。祖聖の御晩年を仰ぐと特にこの感じが切である。

本誌前号の末に私は慈信御房善鸞様の事について触れた。それは余りに簡要を摘んで惣々に筆を馳せたので想いを尽くし得なかつたような感じが残っている。ただ善鸞様の御身を想うと、人間という者の、諸縁に触れて、わが心の思いや願いやに係わらず、はからざる迷路に墮ちゆくはかなき姿が偲ばれ、また特に私のような者に大悲の御名をお届けくださるために、如来の本願海の中に如何ばかりの御苦労が積まれたであろうかが偲ばれて、念仏もうさしめられる。父子の縁の深さ哀しさ、それが人間の力では如何ともならない展開をしてくる。「卯毛羊毛の端にいる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずということなしと知るべし」と言わねばならぬ厳しさを、御身にかけて示したまい一つ、而もそれを縁として限り無き如来の悲願を語り願わしてくださる。それはただ浄土に至りてまどかに和らぎ全く安んじ得る事である。如来、浄土を建立したまい、祖聖、

浄土を指示したまいしこと、ひとえにただ私のような愚悪の身のためであらせられた。私共は、浄土を告げられなれば、今生に安んじ得ないのである。

御伝抄に、「聖人故郷に帰りにて……扶風馮翔ところどころに移住したまいき、」と言う。扶風とに疾風なり、馮とは馬の疾く行く貌、翔とは飛ぶ貌、と「字源」にある。専修寺本には扶風に右京なり、馮翔に左京なりと左訓が附けられている。故郷に帰りたいし晩年の祖聖には定まつた棲家が無く、縁に従つて処々に移り住みたまたうたことが思われる。弘長二歳の冬、額齡九句に満ちて、念仏の息絶えしました時に在せられた「禪房は長安馮翊の辺・押小路南・万里小路東」であつたと記され、「この地は聖人の舎弟尋有僧都の住房、善法坊の故址」と全集の編者は註している。

本誌前号で顧みたように、京都に移られた祖聖の御家族はやがて関東又は北越に別れ住むようになり、京都に残りとどまられたのは祖聖と末の御娘覚信尼とのみになられた。祖聖の御生活は、縁に従つて親しい人々の住房に寓し、関東の念仏の人々から時として寄せられる懇志を資とし、極めてつましく貧に安んじて為されたようである。伝え遺された御書翰の類の中に其の状況が窺われる。

また全集書簡篇に収められている祖聖真蹟書簡の中に

は、いやおむな・いまごせんのはは・そくしやうぼうという人々の名があらわれている。

「いやおむなのこと、ふみかきてまいらせられ候なり。いまだ、あどころもなく、わびるて候なり。あさましくあさましく、もてあつかいて、いかにすべしともなくて候なり。あなかしこ。」

これは三月廿八日附で「わうごせんへ」宛てられた文である。王御前とは恵信尼書簡から覚信尼の俗名と推定されるので、弥女は、久しく想われてきたような覚信尼の幼名なのでなく、全く別人だと為さるべきで、しかも祖聖は、この弥女が照阿弥陀仏という人に召し使われていたのに、新たに東の女房に譲り渡されることになった時、その譲渡を承認した譲文を書いておられるので、弥女は祖聖の下人であつたのだらうと推定されている。之は宮崎博士の著書から教えられたことである。博士はこの事を以て祖聖の生活が余り貧しくはあらなかつたであろうと推測する論拠の一つにしておられるのであるが、私は、当時の社会に於いて下人という者が如何なる身分であつたか、下人をもちながら自ら之を召し使わず、他人の召し使うに委ねておられたのは何に由るのであるか、等の事を判断する知識を全く欠いているので、今でも猶、祖聖は貧しくあられたのだという先入見を脱することができないでいる。

今御前の母といひまた即生房といわれる人々について
は、祖聖が極めて親しき縁を感じておられた事の確かなる
ほか、それが如何なる縁なりしかについては学者の臆測区
々ありて今に定説を見ない。恐らく、何か新資料の現われ
出るようなおもいがけない事の起らない限り、謎として残
るより他無いであろう。然しこの謎の人々に係わりて祖聖
が深く心を痛め、如何にかしてその二人の行く末を安から
しめようと苦慮しておられた御情は、二人に係わる二通の
真蹟書簡から之を窺ひ偲びまづることが出来る。極めて親
しい縁を感じておられた人々の身の上をさへどうとも助け
ることのできない御自身を告げて、常陸の御同朋たちのお
んあわれみを請ひ馮つておられる御筆の跡は、涙なしには
拝見し得ない。

かえりみれば、関東では、御妻子と共に、漸くその数を
増してきた念仏の人人に囲まれて、寧ろにぎやかに又衣食
住の憂いということも恐らく無くて過ごされたであろう。
それが京都では、漸く御妻子からも離れ、孤独にして、世
間から隠遁し、衣食の資は恐らく関東の御同朋から寄せら
れる所に依りてすごされたのであろうし、或は一人、常
に御側に侍りて、老いたる御身を護り、信を尋ね教を蒙
り、また御著述の筆写などにいそしむ御弟子たちがあり、
或は御弟尋有僧都や御娘覚信尼やが親しく仕え又は伺つて
おられたのであろう。時として数人の御同朋たちが相携え

を校合し、『親鸞聖人全集』所収本は草稿本を底本として
この清書本及び専修寺に伝えられたる専信上人手写本を校
合している。この手写のなされたのは祖聖八十三歳の年に
至ると言う。私共は文化の恵沢を蒙りて此等の宝典を拝読
し得る幸慶に感謝したてまつる。

祖聖が御晩年の精力を傾けて著わし遺したまえる著書に
は、浄土文類聚鈔・愚禿鈔・入出二門偈頌・浄土和讃・高
僧和讃・正像末和讃・皇太子聖德奉讃（七十五首）・大日
本国栗散王聖德太子奉讃（百十四首）・浄土三経往生文類
（広略二本）・尊号真像銘文（広略二本）・一念多念文意・
唯信鈔文意・如来二種廻向文・弥陀如来名号徳を存し、書
簡は未燈鈔・御消息集・血脉文集等に轉められており、
又、西方指南抄（法然上人の法語消息行実等を輯録せる三
巻より成る大部のもの）・上宮太子御記（源為憲の三宝絵
詞より聖德太子に係わる部分を抄出せるもの）等が伝えら
れている。此等は悉く御齡八十三歳以後の書写に属するも
ので、概ね其の著又は写の年月日が明らかに識られる、最
後の名号徳は実に八十八歳の著である。

八十歳を越えて此の如き大部の著述及筆写を成しておら
れる事は驚くべきである。而も其の間には関東に於いて慈
信房の事あり、念仏の同朋等の信の動揺あり、鎌倉にての
訴訟の事あり、祖聖の御心は不断に其等の動乱を撰めて憂

て遙かに訪れ来れるを迎え、老を忘れ、夜を徹して語りあ
われたこともあろう。けれども概ねは世に隠れたる閑法人
としてひたすら「聞く所を慶び、獲る所を歎ずる」の筆を
執ることに力が注がれた。之に由りて如来大悲の真実を広
く世間に彰わし、先師法然上人の本意を遠く後代に伝えし
めたまうたのである。

まず常陸に於いて既に稿を進めておられた根本の典『教
行信証』の完成が京都に於ける初数年の主要なる御業であ
られたらうと思われる。久しき年々にわたりて筆を執ら
れ、編み成された生ま生ましい跡を留めつつ此の書の「草
稿本」は、東本願寺に伝わり、其の影印本の頒たれたるに
よりて私共も之を拝読することが出来る。其の頁々に偲ば
れまづる祖聖の悲喜交流する御筆の跡は、まことに「草稿
本」と言われる所以の跡を留めて、私共として感懐の無量
なるものあらしめる。之に比べて、西本願寺に伝われる所
謂「清書本」はまさしく「草稿本」の淨写本というべく、
其の影印本によりて之を窺うに、これまさしく此を書の終
に於いて到達せる相に於ける清書本である。（これ恐らく
祖聖の最晩年、親しく左右に侍した一人の御弟子が、修訂
の完了された祖聖真筆本に依りて之を淨写しまつれるもの
であらうか。其の一点一劃の末に至るまで謹厳慎重に淨写
しまつれる敬虔の筆致、人をして肅然たらしめる。『真宗
聖教經書』所収本はこの清書本を底本として上記草稿本等

い悩みつづめられたのであることを思えば、愈々その驚き
を増さざるを得ない。

歎異抄の前篇、祖聖の御語の数々を結びまづれる章に、
「念仏には無義をもて義とす、不可称・不可説・不可思議
のゆゑにと仰せ候らひき、」とある。まことに一切衆生を
一子としろしめす如来の不可称・不可説・不可思議・の徳
に潤わされ満たされて世間を觀感れみたまいつつ、祖聖は
寂かに念仏の息をとどめたまうた。

「われはこれ加古の教信沙弥の定なり」と言い、「某閑
眼せば加茂川にながて魚に与うべし」と言うたと伝えられ
る御語の中に私は言いしれぬ寂しさを感じる。人生の終に
到る处はかかる寂しさなのであろうか。

「よしあしの文字をもしらぬ人はみな まことの心なり
けるを、善惡の文字しりかほは おほそらごとのかたち
なり。

是非しらず邪正もわかぬこの身にて 小慈小悲もなけれ
ども 名利に人師をこのむなり。」

三帖和讃を結ぶこの語は、「獲得名号自然法爾」の法語と
共に祖師聖人満九十年の御生涯を語けつつ私共の身に迫つ
てくる。ここに正信偈私解の前記として祖聖の御生涯を偲
びまづるの筆をおく。

（十月廿一日武庫川大学にて）

編集後記

十月廿五日、池山忌には、定刻一時半、榊原さんの導師で小経一巻の読経。次で歎異鈔前半の読誦。要所々に榊原さんのお声が涙と念仏にとぎれる、満坐あちこちに称名のこぼるるのみ。外は静寂で、秋陽また清澄でありました。

やがて自己紹介をかねて一人々々の述懐談。集會者四十人に近く、遠くは東京の稲津さん、愛媛の松本さん三好さん水野さん木村さん等、名古屋から私。滋賀の宇野さん阪神から城さん、梶井さん、中井さん大字さん、加藤さん、京都がら白井先生、福本さん、信国夫人と学院生三人、西元さん、向島さん佐々木さん、幸寺さん、杉浦夫人、等々、それに先生の御孫さん二人。榊原さん一統。等々。

つるべおとしに晩秋の陽はおちて四辺は暮色蒼然の中に、御心づくしの御馳走を頂いて散會。残りは、愛媛の松本さん初め七人と私が一泊させて頂く。夜に入つて松本さん、榊原さん等々の讃歎の声しきり。先生のお好きだったレコードも聞えた。

廿六日、白井先生に御挨拶、榊原夫人に伴われて、自照舎に足利老師を訪う。談論風発、八十過ぎられた老師から涌泉の如く法水は流れる。ことに思ひもかけず、老師から近角常観先生の詩文を頂く。午后佐々木徹真さんがわざ／＼私を駅に送るために

来会下さる。

私に老師を尋ねよと勧めてやまなかつたのは、私の叔父でありました。大高時代から『一樹の蔭』や『一河の流』を私に読めと勧めてくれたのも叔父でありましたが、四十年も経た今日、老師の尊い御時間を割いて頂いて、ゆつくり法雨に浴し得ましたことは、私にとつて感銘深い一日でありました。老師と榊原夫人と私と話させて頂きながら、目に見えませんが、たゞ叔父がそこに来て喜んでくれているという感じをま／＼と受けました。有難い半日でありました。

佐々木さんとも遠い不思議な縁の糸に結ばれて居りまして、汽車を待つしばしの間を、身の上話やら、岡山、広島、京都の信仰界の模様など承り得ましたことは、蓬戸不出に等しい私には、嬉しいことでありました。

一道会の詳報は、榊原さんをお願いして原稿を頂くことにし、松本さんの筆記の池山先生の御講話の原稿は十二月の慈光誌に頂くことになりました。

愛知、三重の水害は未だ解消されず、防潮堤と排水とに全力が注がれて居ります。又漸く寒空に向う今日、泥水が退き、家の修理と家財の整理に大童の方々の上に、御健康を念じてやみません。

日本全国、更に米国其他の国々から救援の手が延べられ、私共名古屋人としては謝すべき言葉もありませんが、嘗て戦災、焼

土から立ち上つたと同じく、踏まれても／＼立ち上る雑草の如く、必ず倍旧の復興の底力も現われ皆様の御護念に応え得ると信じて居ります。

御案内

△毎月、第一、二、三日曜、講話会。
午後一時半、一道會館。市電新郊通一丁目下車。
△毎月二十四日、午前午後、法話会。
△昭和区小松町、教西寺。市電御器所通下車
△十一月十六日午後二時、中区南小川町、久遠寺、報恩講。
△十一月二十九日午後二時、四日市々大矢知、真西寺。法話会。
△十二月、一、二、三日。浜松市池町、芳華寺、報恩講。

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)
一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区野上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区野上町二ノ二八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番